

ま ほ う つ か
魔法使いアルル①

は お り
羽織かのん・作

か を る
kaworu・絵



アルファポリスきずな文庫

もくじ

第一章	で あ い …… 6
第二章	ま ほうきょう かい …… 46
第三章	しゅく ふく ま ほう つか …… 76
第四章	にし もり …… 118
第五章	ま じょ たたか …… 196

Contents

登場人物

Character

サリー

アロンの屋敷の執事。

子どもたちを
常に見守る。

レオ

王国の第二王子。

闇の魔法の使い手。

アロンの下でアルルと
一緒に魔法を学ぶ。

ルビー

執事見習い。

アルルたちと
一緒に暮らす。

アロン

王国で有名な大魔法使い。

アルルとレオを
優しく導く。

アルル

銀色の髪、黄金色の瞳を持つ

心優しい女の子。

アロンの娘となり、
魔法使い見習いとなる。

第一章 出会い

ここはホープ王国の王都から離れた西にある小さな領地。
銀色の髪と黄金色の瞳を持つ少女アルは使用人見習いとして働いていた。

夜明け前の星が輝くうちから私は働き始める。

まずは馬小屋の掃除とエサやり、水の入替えを済ませ、それから畑で野菜を収穫。
休む暇もなく時間に追われながら、それが終わったら一度、朝ごはんを食べに行く。

「ほらよ。そこに置いとくよ」

調理場で働く使用人のおばさんは意地悪な笑みを浮かべながら、棚の横に積み上げられている木箱の上へと、少しカビたパンを置いた。

食堂では使用人たちがぐすくすと私を馬鹿にするように笑う。

私はぱつとパンを手に取り小さく「ありがとうございます」と言っつてその場から急いで出た。
自分が厄介者なのはわかつている。

そして、休む暇もないことも。

私はカチカチのパンを小さく割つて、カビのところを剥がして捨てた。

座って食べると水をかけられたり、うしろから蹴られたりする。だから働きながらパンを口に入れてゆつくりとかみ、呑み込む。ゆつくり食べている使用人を見ると、なんで自分ばかりがこんな目に遭うのだろうかと思しくなる。

けれど仕方ないのだ。私はお情けでこの屋敷の使用人見習いとして働かせてもらっている。
ここを追い出されたらほかに行く場所なんてない。

お腹にぐつと力をいれて目に浮かぶ涙を必死にこらえる。
私のお母さんは、元々はこの屋敷のお嬢様だった。けれど、今は行方不明。誰が父親かもわからない赤子だった私を家に置き去りにして消えた。

祖父は私を孫と認めてくれず、使用人見習いとして屋敷に置いている。

だから、私はいらぬ子。
傷つけてもいい子。

使用人たちは、私をいじめて気分を晴らす。

前に一度、同じ使用人なのだからいじめないでと言ったことがあった。けれど、その時にひ

どく嫌がらせをされたので、それ以来、口答えをするのも怖くなった。
瞳に何度も浮かぶ涙をこぼさないように、ぐしぐしと腕で顔を拭った。

こんな私なんて消えちやえばいいのに。

これまで何度もそう思っただけ、首を横に振る。

だめだ。自分だけはそんなふうには思っただめ。

たまに、仲が良さそうな親子の姿を見て、家族ってどんなものだろうと想像する。手をつないでもらったり、抱きしめてもらったり、そんな様子を見ると、心の中がざわめく。

いいなあと思ってしまう自分が苦しくて、それを忘れるためにも仕事を一生懸命にする。

ふと気がつくあたりはもう真つ暗で、私は最後の仕事を片付けるとヘトヘトになりながら納屋の中へ入った。

ここが私が寝起きをする場所。藁と小さな机があるだけの納屋。

藁の上にどさりと体を寝かせる。

もうこのまま、まぶたを閉じてしまいたい。けれど今日は特別な日。

私はどうにか体を起き上がらせて、残っていたパンをポケットから出した。

「今日で私も十歳だ。ふふ。アルル、お誕生日おめでとう」

お母さんが私に残してくれたのは、名前と誕生日だけ。祖父に祝ってもらったことは一度もない。「お前の生まれた最低の日だ!」と怒鳴られさえた。

静かな暗闇の中で、小さな声で誕生日を祝う歌を歌った。

幼い頃からほかの誰も自分が生まれたことを祝ってくれなくても、自分だけは祝おうと決めている。

歌を歌い終わると、ただただ静かで、悲しくなる。

普通の家族なら、きつと誰かが祝ってくれるのだろうな。

そう思った時、ガタリと納屋の戸が開き、私はびくつとした。

「はて、さて、今のはお前さんかね?」

そこにいたのは、白銀のローブを身にまとい、長いピンクのひげを可愛くリボンで結んだお

じいさん。

私が驚いているのを見て、そのおかしなおじいさんはあごひげを撫でながら言った。

「歌がうまいな」

「い……いえ。あの、おじいさんはどなたですか?」

「わしは、アロンという。お前さんは?」



「……アルルです」

「アルルというのか。アルルは……ここに一人で住んでおるのか？」

「……はい。使用人見習いなので」

アロンさんは私をじつと見た。表情には出さなかったけれど、なぜこんな所で暮らしているのかと思っているのがわかった。

「ふむ。アルル。明日からしばらくお前さんの仕事の様子を見学したいんだが、いいかの？」
その言葉に、何か自分がしてしまったのかと怖くなって、アロンさんの前に私は慌ててひざまずいた。

「も……申し訳ありません。私、何かしましたか？ お願います。謝りますから！」

アロンさんは慌てて私を立たせ、首を横に振った。

「違う、違う。少しお前さんがどんな仕事をしているのか見るだけだ」

「ほ……本当に？」

「ああ。それでは今日はもう遅い。おやすみ。そうだ、これをあげよう。誕生日おめでとう」

アロンさんはポケットからキャンデーを取り出して私に手渡した。

「え……どうして？」

「誕生日の歌を歌っていたらう？ それではな」

アロンさんはそれ以上何も言わず、納屋から立ち去った。

初めて、人からプレゼントをもらった。嬉しくて、もらったキャンデーをぎゅつと握り、ふふつと笑った。

甘いお菓子は高価なもので、キャンデーは食べたことがない。すぐに食べてしまうのはもつたいなくて、どんな味がするのだろうかとうわくわくしながら、その日は眠りに落ちた。

次の日、朝からアロンさんがちらちらと自分の様子を見ているのがわかった。けれど、周りには気づかない程度でほつとする。

ただ、朝ごはんをもらう時は恥ずかしくなった。

カビたパンを食べる姿は見られたくない。パツとパンをポケットにしまふ。

「なんだ？ 今日はいやに慌てているじゃないか」

「はらぺこか？ はは！ なら水でも飲みな！」

そう言われてバケツの水をかけられた。ポタポタと髪から水が落ちる。

それを見て使用人たちは笑い声をあげた。

「はは！ お前はゴミみたいだから、ちようどきれいになったね！」

「いや、まだ臭いな」

ぼしやつと音を立ててまた水をかけられる。

怖くてしやがみこみそうになるのを必死でこらえ、嫌な時間が過ぎ去るのをまつ。ここで何か反応すると、ぶたれたり蹴られたりするのわかつている。

本当は怖いし、今すぐにでも逃げてしまいたい。

助けてと叫びたい。でも、誰も助けてはくれないって知っている。だから何も言わない。

今までずっと、誰も私を助けてくれなかった。

これからだって、誰も助けてくれるはずがない。

そう、思っていた。

「何をしている！」

アロンさんは慌てて入ってくると、びつしり濡れた私を背にかばってくれた。

心臓がドキドキと鳴り、自分をかばう大きな背中を見つめる。

使用人たちは突然現れたアロンさんに驚いていたようだけど、その着ているものを見てお客様と考えたのか、頭を下げた。

「お見苦しいものをお見せし、失礼いたしました。ですが、それはお客様がご心配する必要の

「ない子ですのぞ」

アロンさんは言い返そうとしたが、私が震えているのに気がつくとうんと鼻を鳴らし、何も言わずに私を抱きかかえてその場を後にした。

私は抱き上げられたのが初めてで、どうしたらいいのかわからずにじっとしていた。抱きしめられる腕に、人の温もりを感じて泣きそうになった。

助けてくれた。誰も助けてなんてくれなかったのに。助けてくれたのだ。

アロンさんは畑のほうに歩いて行くと私を降ろし、そして小さく何かを呟いた。すると私の体はほつかほつかと温まり、洋服は一瞬で乾いていた。

「魔法……ですか？」

「ああ」

「ありがとうございます。でも……私は次の仕事があるので」

甘えちゃだめだと、心の中でつぶやいて、それ以上何を言っていないのかわからず、水をくんだ桶を手にとって畑の水やりを始めた。

アロンさんは近くにあった岩に腰掛けると、私に尋ねた。

「この畑はどこまでアルが世話をしているのだ？」

使用人たちとのやり取りについて聞かれなかったことにほっとして、私は手を止めて答えた。

「全部ですよ」

それにアロンさんは目を丸くする。

「全部とは？」

「え？ この屋敷内の畑は私がすべて世話をしています」

アロンさんは驚いた様子で広い畑に視線を向けると立ち上がり、植えられていた野菜の葉を指でなぞる。そして、今度は土を見て、桶に入っている水を口に含んだ。

なるほど、とアロンさんはうなずいた。

「ほかにどんな仕事を？」

「家畜の世話と、水くみもしています」

「なるほどな。なるほど。これで納得がいった。アル、ついてきなさい」

アロンさんの言葉に驚いたけれど、お客様の言葉を見無視することはできない。おとなしく後をついていった。

けれど、屋敷の中へアロンさんが入ろうとした時、私は足を止めた。

「すみません。私は……ここにあげません」

屋敷は、偉い人が住む所で、自分が入れば怒られる。

おしおきをされると考えただけで、体が震えた。

その様子を見たアロンさんはにこりと笑みを浮かべ、私をひよいと抱き上げて歩き始めた。

「大丈夫だ。心配するでない」

私はどうしたらいいのかわからずに固まり、アロンさんにしがみついた。

アロンさんはひときわ大きな部屋の扉を開けて中へ進み、部屋の中央に置かれた豪華な椅子に腰掛けた。

「あの……ここは？」

「まあ、話を聞いて、そして自分で決めなさい」

もしかしたら、何か自分は怒られるのではないかと恐怖が胸の中に広がっていく。

その時、扉が開き入ってきた人を見て、私は慌てて視線をそらしうつつむいた。

「アロン様。なぜそれを伴っているのです？」

「ははっ！ それとはな。この女の子はシーバンス殿の孫だろう？」

私はアロンさんが知っていたことに驚いた。

「人を魔法で呼びつけ、一体なんなのですか？」

「わしがここに来た理由は伝えたな？」

「はい。なんでも我が領がほかの土地に比べて豊作であり、その原因を突き止めに来られたのですよね？」

「そうだ。それでな、原因がわかったのだが……その前にこの子だが、かなりいじめられているようだな？」

私はその言葉にびっくりとする。

そしてできるだけシーバンス様の目に映らないように体を縮こませる。

「孫ではない。ただ私の娘が置いていった者で、仕方なく置いてやっているのです」

それを聞いたアロンさんは表情を崩さずに言った。

「ならば、わしが引き取ってもかまわぬか？」

「え？」

思わず顔を上げてアロンさんを見た。

アロンさんは私に優しく微笑む。

「わしはこの子連れて帰りたい」

シーバンス様は何かを探るようにアロンさんを見つめた。

「大魔法使い様が、なぜそのような子をも？」

「ほう？ わしが欲しがれば惜しむのか？」

アロンさんがシーバンス様をにらみつけると、彼はうつむき、首を横に振った。

「い、いえ、めつそうもない。どうぞ連れて行ってください」

アロンさんは満足そうにうなずいた。

「まあ、そうは言ったがアルル。わしは無理に連れていくことなどしない。自分で選び、決めるなさい」

その言葉に、私の心は震えた。

自分で、選ぶ？

「え？ ……私は……」

「ちゃんと自分で考えなさい。明日の朝、返事を聞かせておくれ。シーバンス殿、この子には考える時間が必要だ。よって、今日の仕事は休みにしてくれ」

「……仰せのままに。おい。ほかの使用人に仕事を回せ」

シーバンス様は側に控えていた執事にそう声をかけ、執事はうなずいて外へと出ていった。

シーバンス様があつさりと言うことを聞くのだから、このアロンさんという変なおじいさん

は偉い人なのだろう。

「それでは、アルル。わしはシーバンス殿とまだ話があるからの、部屋に戻っていなさい」

「は……はい」

とにかく言われたように、一度納屋に帰って頭の中を整理しよう。

きれいな床にまた土で汚れた足をつけることにためらった。でも仕方ないとあきらめ、できるだけ端を歩いて屋敷を出た。

とにかく考えなければ。

この屋敷から出る？

ほとんど何も知らないアロンさんについていく？

自分で何かを決めるということをしたことがない。

どうしたらいいのか悩みながら歩いていると、突然背中をドンと押された。

「うわあ！」

前に倒れ、膝を擦りむいた。

背中にも痛みを感じた。それでも立ち上がり振り向くと、怒った表情を浮かべて数名の使用人が立っていた。

「なんであんなの仕事(しごと)をあたしらがしないといけないの？」

「お前の仕事(しごと)だろ！」

「ふざけるなよ！」

シーバンス様(さま)から仕事を命令(めいれい)されたのだろう。

「あんな広い所(ところ)、私(わたし)たちがなぜやらなけりやいけないのさ!」

「あーあ。お前(まえ)が働(はたら)かないから、俺(おれ)たちが重い野菜(やさい)を運(はこ)ばなきゃならないのか？」

「本当に、面倒(めんどう)だわ」

私(わたし)が朝(あさ)から晩(ばん)まで働(はたら)きづめなのは、ほかの使用人(しようにん)が私(わたし)に仕事(しごと)を押し付(お)けるから。私(わたし)はそれに氣(き)づいていたけれど、今まで仕方(しかた)がないと諦(あきら)めていた。

必死(ひっし)に私(わたし)が働(はたら)く姿(すがた)を見て、使用人(しようにん)たちはさぼってはにやにやと笑(わら)っていた。

私(わたし)には理(り)不尽(ふじん)な言葉(ことば)だ。アロンさんと一緒(いっしょ)に行(い)けば、この苦(くる)しみから解放(かいはう)されるのかな……

「おい、聞(き)いているのか？」

そう言(い)うと、一人(ひとり)の男(おとこ)が私(わたし)をもう一度(いちど)突き倒(たお)した。

しりもちをついた時(とき)、ポケットからアロンさんにもらったキャンデーが落(お)ちた。

慌(あわ)てて拾(ひろ)おうとしたけれど、男(おとこ)に取(と)られる。

「なんだこれ……キャンデーか！　なんでこんな高級(こうきゆう)なもの、お前(まえ)が持(も)っているんだ！」

「か……返(かえ)して！」

言(い)い返(かえ)したのは初(はじ)めてだ。

男(おとこ)はにやりと笑(わら)い、キャンデーを私(わたし)の手(て)が届(とど)かないように上(うへ)に挙(あ)げた。

「盗(ぬす)んだのか？　なんてやつだ」

「違(ちが)う！　もらったの！」

「へーそうか。はは！　残念(ざんねん)だったな！　これは俺(おれ)がもらっておく」

なんで取(と)られないといけないの。

生(う)まれて初(はじ)めて、人(ひと)から祝(いわ)ってもらった。生(う)まれてきてよかったのだから、言(い)ってもらえた

氣(き)がして嬉(うれ)しかった。

そんな、初(はじ)めてのプレゼントだ。

「お……お願(ねが)い。返(かえ)して。初(はじ)めてのプレゼントなの」

男(おとこ)はバカにしたように笑(わら)った。

「お前(まえ)なんかに？」

近(ちか)くにいた女(おんな)も笑(わら)う。

「誰からも愛されないお前に？」

「何勘違いをしているんだ？ これはお前へのプレゼントなんかじゃない。もらったのが本当なら、それは哀れみだ。お情けだ」

「かわいいそうなの。はは！ バカねー」

それでもいい。

初めてもらった、私のプレゼント。

お願い。お願い。初めてできた宝物なの。

「返して！」

男は、包み紙を開き、口の中へと放り込んだ。そして、美味しそうに歯でかんだ。

甘味は高級品で、使用人にはなかなか手の届かないもの。

けれど私にとっては、違う価値のあるものだった。

涙がぼたりと、私の瞳から零れ落ちた。

次の瞬間、一瞬にして太陽が消え、空が闇で包まれた。

私をいじめていた使用人たちはその異様な様子に恐れ、あたりを見回した。

「な……なんだ？」

私の周りの地面から黒い闇が広がりはじめ、ボコボコと盛り上がるようにしてたくさんの影が生まれる。

一メートル以上ありそうなムカデや、巨大な蜘蛛、蛇にカエル、そんな影がうごうごととしている。

「ぎゃあ！」

「ば……化け物だ！」

「なんだ！ 一体何なんだ！」



恐ろしい影たちから逃げようとするが、あたりを囲まれて動くことができない。
私はそんな中で、しくしくと泣き続けていた。

けれども、もうそんなことに使用人たちはかまっていられないようだ。

何がどうなったのかわからない様子で、それぞれに悲鳴をあげ、怯え、震えている。
影は少しずつ増え、周りに広がり、人々を呑み込もうとする。

「いやああ！ やめて！ こないで！」

「くそくそくそ！ 消えろ！」

「やだやだ！」

狭くなっていく安全な場所へと皆が押し合いながら身を寄せていく。

「ちよつと！ 邪魔よ！」

「やめて！ 押さないで！」

「お前が押すなよ！」

怒鳴り合う姿を、私は涙の溜まった瞳で見つめた。

なんて汚いんだろう。

でも、私も同じなんだ。

私の足元には水面のように闇が揺らいでいる。

その時、渦巻く闇の中に眩いばかりの光の道ができる。

人々はさがるようにその道を押し合いながら進んでいく。

私は闇の中でその背を見送った。

なんであんなに汚いのに、光の道を進もうとするのだろう。

私はここにしよう。

汚い私はここにいるほうがいい。

そう私がうつむいた時、肩に温かな手が触れた。

「アルル？」

名前を呼ばれはつと顔を上げると、アロンさんが優しく微笑みながら立っていた。

「ここは寂しいだろう。一緒に出よう」

私はじつとアロンさんを見つめ、ゆつくりと首を横に振った。

「嫌。私はここにいます。ここの方が外よりもいい」

「そんなことはない」

穏やかに言うアロンさんを真っ直ぐに見つめて私は言った。

「人は皆汚いもの。自分より弱いものをいじめて、自分ばかり助かろうとする。いい思いをする。でも、それは私も。だから、私はここにいる」

体を闇が呑み込もうとする。でも何も怖くない。

アロンさんが私を優しく抱きしめた。

突然のこと、その温もりに体が固くなった。

アロンさんは小さな声で言った。

「この出会いは運命なのだろう……大丈夫だ。これからはわしがアルルを守ろう」

「え？」

「アルル、たしかに人には汚い面もある。だが、愛をもち、美しい面もまた、あるのだよ」

「私はそんなの知らない」

「なら、わしがアルルに見せよう。わしの娘になつておくれ」

私はその言葉に目を見張った。

「娘？」

「嫌か？」

「なんで？ 昨日会ったばかりなのに」

「そうさね。だからこれからアルルのことを教えておくれ」

アロンさんの瞳を見つめる。そこには嘘偽りが一切なかった。

心にじわりと温かな感情が湧く。

「い……一緒に、いてくれるの？」

「もちろんだ」

「私は汚いよ。ゴミで役立たずでいいほうがいいって皆が言う」

「そんなことを言う者たちは目が腐っているのだ」

「本当に……私でいいの？」

「ああ。わしはアルルがいい。アルルを娘に迎えたい」

アロンさんはぎゅつと、私を抱きしめる腕に力を入れた。

「それに、アルルとアロンは名前がそっくりじゃないか。これはもう親子になるしかない。わ

しもひげを剃ればおじいさんではなく、おじさんくらいの姿にはなれるだろうよ」

その言葉に私は笑った。

「ふふ。そのままでもいいよお」

そう言つて笑うと、自分の中の黒いものが消えていくような気がした。

闇は私の影に溶けるようにして消えてしまった。
太陽の光が戻ってくる。目に映った光景は使用人たちが泣いて抱き合ったり、助かったことを子どもと笑い合ったりしている光景だった。

先程まではとても汚かったのに、今はきれいに見える。

「アルル、どうするかね？ 自分で決めていい」

私はぎゅつとアロンさんの服をつかみ、うなずいた。

「私、娘になる。なりたい。いい？」

歯を見せてアロンさんは笑うと、私を軽々と抱き上げた。

「ああ！ よろしく、わしの娘、アルル！」

* * *

アルルはその後、疲れたのか気を失うようにして腕の中で眠ってしまった。そんな彼女を抱え直すと、アロンは自分の滞在する客室へと運び、ベッドの上に寝かせた。

眠っているアルルを見つめ、アロンはうなり声をあげないように手で口元をおさえた。

闇の精霊を呼び出す力。そして、闇の中に体を浸しても意思を保ち続けられる強い魂に、アロンは驚いていた。

闇に体を浸せば、ものの数分で自分の意思はなくなり、気がおかしくなる。

だが、アルルは違った。

大魔法使いである自分でも闇に体を侵されれば、魂は守護魔法で守れても、魔力をどんどんと失っていく。

だが、アルルにはそんな様子も見られない。

その時、部屋をノックする音が聞こえた。

扉を開けるとシーバンスがおり、二人は応接室へと移動し、向かい合って座った。

「それで、何かな？」

シーバンスの顔色は悪く、言葉を出すまでにしばらくの時間がかかった。

「……この場で言わず、後で文句を言われても困るからお伝えしておきます」

「ほう？」

「あれは、人の皮をかぶった化け物ですよ。先程の光景を見てください。私にはわかる。あれのしわざだ。それでもあれを引き取ると言えますか？」

アルルの名前さえ呼ぼうとしないシーバンスに怒りを感じたが、表情には出さなかった。
「ああ。問題はない」

「……そうですか。さすが大魔法使い様だ。もしや私たちのためにあの邪悪な生き物を引き取ってくれるのですかな？ それならよくわかる」

まるで独り言のようだ。アロンは怒りを表さないように必死にこらえた。

「それでは、シーバンス殿。この魔法契約にサインを頼む」

アロンは懐から魔法の杖を取り出すと、軽く振った。すると、ぼんつと、書状が現れる。

「これは？」

「はは。一応な。わしにアルルを養女として引き渡し、今後一切関わりをもたないという契約書にサインしてほしいのだ」

シーバンスはうなずき、すぐさまサインをした。

アロンはニツコリと微笑み、満足そうにうなずいた。

「よし、これでアルルはわしの娘だ」

アロンは魔法の杖を振るい、その契約書を消した。

「明日にはここを出ていくのでな。世話になった」

「ええ。わかりました。ですが、その……この土地が豊作である原因はなんだったのです？」

「ああ。……まあ、そのうち気づくだろう」

それ以上、アロンが口を開く様子がないと知ったシーバンスは、言えないのだろうと察してうなずくと部屋をあとにした。

それからアロンは客室に戻り、アルルを見つめた。

この地域には珍しく、銀色の髪に黄金色の瞳をした少女。

十歳とは思えないほど痩せていて、今にも折れそうな細い手足。

ただただ無造作に伸びた髪を一つにくくり、これまで必死に働いて生きてきたのだろう、手にはたくさんのマメができていた。

アロンはその手を優しく握った。

その時、部屋いっぱい妖怪たちが現れる。

妖精が人の前に現れるのは珍しく、アロンは驚いた。

『アルルを連れて行くの？』

その言葉に、やはりな、と思いつながら、アロンはうなずいた。

「ああ。この娘はここにいては幸せになれない」

『ありがとう。私たちではどんなに頑張ってもだめだったから。その子をお願いね』
そう言うとき妖精は消えた。

アロンは、ゆつくりと息を吐いた。

月夜の晩、歌に誘われ納屋に赴いた。

歌声には心地の良い魔力が練られており、その魔力の強さに驚いた。

アルが世話をする畑にも水にも魔力は満ちており、それに誘われて妖精が集まり、この領地一帯が妖精の加護を受けて豊作となったのだろう。

アルがこの地を離れば、豊作は終わる。

後は人の努力しだい。シーバンスはいずれこの恵みがアルの力だったと気づくだろうが、契約はすでになされた。

アロンは無事に仕事も終え、その上、娘もできて万々歳であった。

* * *

目が覚めると、見覚えのない天井が見えた。それにふかふかのベッドの上にいる。

自分がどこにいるのかがわからずに飛び起けると、アロンさんの声が聞こえた。

「おお。目が覚めたか」

ソファーには、紅茶を飲みながら新聞を読むアロンさんがいた。

「あ……ごめんなさい。ベッドを……」

申し訳なくて謝る私に、アロンさんは笑みを浮かべた。

「愛娘の寝顔はとても可愛かった。よし、では朝食にしよう」

そう言うアロンさんが魔法の杖を振ると、空中に皿のつたスコーンやハムにベーコン、スープにサラダが現れ、机の上にセッティングされていく。

私は目を丸くした。

「す……すごい」

「そうかね？ ふふ。だが、アルも魔法を学ばずぐに使えるようになるさ」

「え！ ……あの……私が魔法を？」

アロンさんはうなずいた。

「ああ、もちろんだ。簡単な魔法は杖がなくてもできるがな、あつたほうが魔力も込めやすくて便利だからな。家に帰ったらアルの杖も準備しよう」

自分が魔法を使えるようになるなんて考えたこともなかった。本当に自分にも魔法が使えるのだろうかとかわくわくしてくる。

「まあ、先に腹ごしらえだ。さあ、こちらで一緒に食べよう」

おずおずと机まで歩いていくと、椅子に座った。

たくさんさんの料理にぐくりと喉がなり、お腹がなる。

恥ずかしくてうつむくと、アロンさんは盛大に笑った。

「よかった！ はらぺこだな。よし食べよう！」

「あの……本当に食べてもいいの？」

「当たり前だろう。何をためらう？」

「えつと……だつて……私なんか……」

「アルルはわしの娘だ。なんかとは言うな」

アロンさんは私を真っ直ぐに見つめると、はつきりと言った。

「アルル。本当は食事のあとに言おうと思っていたが、先に言っておこう。わしといくつかの目標をたてよう」

「目標？」

「目標？」

「ああ。アルルはこれまでとこれからでは生活が全く変わるだろう。だからな。なに、簡単なものだ。一つ目、自分のことは自分で決めること。二つ目、自分のことを劣っていると思わず何にでも挑戦すること、三つ目、毎日を楽しむことじゃ。どうじゃ？」

そう言われても、どうすれば良いのかわからなかった。

けれどこれから親子になるのだから、親の言うことは聞いたほうがいいのだろう。

それを見透かしたようにアロンさんの目が光った。

私はうつむくと、一つ目の目標を守って言った。

「できるだけ、頑張る」

アロンさんは満足そうにうなずいた。

「さあ、食べよう」

「あの、私……作法がわからなくて……」

すると、アロンさんはスコーンを手に取り、がぶりとかぶりついた。

「はは！ まあ、これから覚えていこう。だが、今日はまず食べよう。作法なんぞいいわい」

アロンさんの様子がおかしくて思わず笑った。それから温かな食事を初めて口にしました。

そして、一口食べ、二口食べ、につこりとこちらを見られるアロンさんを見て、涙が出た。

「何度も何度も手で拭うがとまらない。」

「おいしい」

誰かと一緒にご飯を食べることが、とてもとても嬉しかった。

泣きながらも、パクパクと食べる私を、アロンさんは笑みを浮かべて見守った。

「ゆつくり、よくかんでお食べ」

「う……うん」

「ほら、のどが詰まらないように、ミルクも飲みなさい」

ミルクを手渡され、ごくごくと飲んだ。

口の中いっぱい甘さが広がる。

アロンさんは目を細めると一緒に食事をしてくれた。

食事を済ませ、部屋を片付けるとアロンさんは私を連れて部屋を出た。

荷物はほとんどなく、シーバンス様に挨拶をしたらすぐに馬車に乗って帰ると聞き、私はアロンさんと手をつないで廊下を歩いた。

手が温かい。改めてアロンさんが自分の家族になってくれるのだと幸せを感じた。

今までずっと欲しかったもの。心の中もほっこりと温かくなる。

シーバンス様に挨拶をする時、すごく嫌な目で見られたけれど、アロンさんが視線からかばうように背中隠してくれたのでほっとした。

屋敷を出ると見送りの使用人たちが立っている。

アロンさんに連れられ、馬車に乗り込む前に私は足を止めた。

振り返り、シーバンス様と使用人たちに頭を下げた。

「これまでありがとうございました。さようなら」

視線からは自分をバカにするような気持ちを感じた。

それでもこれまで生きてこられたのは、ここにいられたおかげだ。

私は顔を上げると、馬車に乗った。

誰も何も言わなかった。

二度とここには戻ってこないだろう。でも寂しくはなかった。

馬車が動き出し、屋敷が遠ざかっていく。

「アルル。大丈夫か？」

「うん。大丈夫」

馬車は町を過ぎ、そして森に入った。

「よし、アルル、人がいなくなつたからの、ここからは空を飛ぶ。準備はいいか？」

ドキドキしながらうなずいた。

アロンさんが杖を振つた瞬間、キラキラと光が舞い、馬車の天井が消えて青い空が見えた。馬と御者は美しい翼の生えたグリフィン（獅子の胴体にワシの頭と翼のある幻獣）へと変わると、アロンさんが綱を操り、一気に上空へと飛んだ。

「わあ！」

空は広く、雲に手が届く。

「すごい！　すごい！」

「はっはっは！　魔法使いのグリフィンのソリは楽しいだろう？」

私は両手を広げてうなずいた。

「楽しい！」

風をきつて飛ぶのはとても心地いい。

生まれて初めて心からの自由を手に入れたような気がする。

アロンさんの屋敷についた頃には日は傾き夕方になっていた。

私はその屋敷の大きさ、そして執事の姿を見て目を見開いた。

執事は背の高いのつぽのうさぎであり、うやうやしく帽子を脱いでお辞儀をした時に耳が

ぴよこんと動いた。

「アルルお嬢様、執事のサリーと申します。サリーとお呼びください。よろしくお願いいたします」

「はっ、はい！　こちらこそです」

「基本、この屋敷は魔法で全て動いているから、執事はサリーだけだ。何かあればベルを鳴ら

せばサリーが現れるからの。これがアルル専用の

ベルだ。首から下げておきなさい」

アロンさんはそう言くと、私の首にネックレス

型のピンクのリボンがついたベルをかけた。

私がちらりと何うようにサリーを見上げると、

サリーの青い優しい瞳と目があった。

「何でも言ってくださいね」

にこりと微笑まれる。もし自分にもお母さん



がいたら、こんなふうに優しい瞳で見てくれるのかな。穏やかなサリーを一目で好きになった。次の日の朝、私はアロンさんと一緒に街に出た。城下街ということもあってとても賑わっている。

私の胸が高鳴った。目に映る物すべてが珍しく、うろちよと歩き回る。迷子になりそうだと思ったのか、アロンさんはしつかりと私の手を握ってくれた。

「どこに行くの？」

アロンさんはどんと道を進んでいき、大通りから外れていく。

「必要なものがそろう場所だ」

路地を曲がり、アロンさんが入ったのは、見たことのない看板の店だ。

「あらん。アロン様。今日はどうしたの？」

そう言つて現れたのは、一つ目で紫の唇がツヤツヤかな女性だった。

「マダムレディ。『ジョッピングモール』へ頼む」

「ふふ。わかったわあ。お嬢ちゃん、初めてだと刺激が強いから耳をふさいで」

「はっ！ はい！」

私が耳をふさぐと、つんぎくような声でマダムレディが歌った。

耳がじんじんとする。地面からはぐにやりぐにやりとツルが伸び、扉の形に変わった。

「いつてらっしゃい」

「さあ、アルル、行くぞ」

ひらひらと手を振るマダムレディと別れ、ツルの扉をくぐるとそこには不思議な大きな箱型の建物があった。

「さあ、今日は買い物だ！ 行くぞ。まずは服からだ」

建物の中に入ると、いろいろな人や、人でないものたちがたくさんいた。

「ここは魔法に関わる者たちが集まっているから、人間のほうが少ないぞ。服は七階か」

はぐれないようにアロンさんの手をぎゅつと握る。

通路を進んでいくと、建物の中央に大きなツルがあり、天井まで届くと折り返してアーチ状にまがり地面に戻ってくる。

なんと、そのツルの葉に皆が乗り、必要な階で降りていく。

「これ、どうなっているの？」

「ん？ ツルが地中を通りドーナツのように輪っかになっていてな、ぐるぐる回っている。地中からツルが自分で魔力を吸い上げているのじゃ」

「へえー。すごい」

タイミングよくツルの葉に乗り、七階で降りる。

するといきなり目の前を火の粉が飛び交っていった。

突然のことに驚いたけれど、アロンさんは冷静に目の前に飛んでくる火の粉を杖で弾いた。

「お客様、申し訳ございません。竜族のサラマンダー様が暴れておりまして」

店員であろうその人は、大きな鼻に尖った耳の小人であった。

アロンさんはため息をつくとき、炎を吐き出す巨大なサラマンダーの目の前に立った。

「邪魔じゃ」

サラマンダーが炎を噴くと、アロンさんは杖を振って水の壁で火を消す。そのままサラマンダーを水のボールに閉じ込めた。

一瞬のできごとだけど、客たちからは歓声が上がった。

「大魔法使いのアロン様だ！」

「さすが、王国きつての大魔法使い様だな！」

「ありがとうございます！ お礼にサービスさせていただきます！」

歓声が響く。アロンさんはもしかしてとんでもない人なのかな。

それから店舗を巡り、洋服から日用雑貨まで買いそろえると、へとへとになりながら屋敷に帰り着いた。

晩ごはんの時間までベッドに横になっていたけれど、一日を振り返るとにやにやと笑ってしまふ。

こんなに楽しい一日は初めて。まぶたを閉じてもすぐに光景が思い出せる。

「お嬢様、夕食の時間ですよ」

サリーにそう声をかけられ、慌てておきあがる。私の様子を見てサリーはにつこりと微笑み、指をパチンと鳴らした。

すると一瞬で私の服は水色のキレイなドレスに変わって、髪の毛も可愛らしくハーフアップになつていた。

「わあ！ すごい！」

鏡の前でぐるぐる回って自分の姿を確かめる。どこかのお嬢様にでもなったようだ。嬉しくて、何度もその場でぐるぐる回った。

「よくお似合いですよ。さあ、参りましょう」

サリーに案内されて扉を開く。

目にした光景に私は言葉を失い、口をぽっかりと開いた。

光り輝く美しい玉がいくつも浮かび、机の上には豪華絢爛なご馳走が並んでいる。

そして一番目を引くのは宙に浮かぶメッセージだ。

『お誕生日おめでとう！』

文字の周りには火花が飛んでいて、嬉しくて瞳に涙がたまる。

「アルル！ 遅くなったが、お誕生日おめでとう！」

アロンさんの声が響き、私は勢いよく駆け寄るとその腕の中に飛び込んだ。

この優しい人が、私のお父さんなのだ。それがとても嬉しくて、ぎゅうぎゅうと抱きしめた。

そして、ずっと呼びたかった言葉で呼んだ。

「ありがとう！ お父さん！」

お父さんと呼んで嫌がられないだろうかと一瞬怖くなったけれど、すぐにその不安な気持ちちは消えた。

「どういたしまして。初めてお父さんと呼んでくれたのお。はっはっは！ なんとも嬉しいものだな！」

お父さんは満面の笑みを浮かべると、私をぎゅつと抱きしめその場でくるくると回った。

こんなにも幸せな日は、生まれて初めてだ。

人にお祝いをしてもらうことの嬉しさ、お父さんと呼べる人がいる安心感。

幸せってこういう気持ちなんだな。胸の中がほかほかする。

豪華な料理にクリームたっぷりの誕生日ケーキ。

初めて食べたケーキはとつても甘い。こんなにも幸せで、夢だったらと思うと怖くなった。

そう言くと、大きな声で笑われて少し恥ずかしい。

お父さんは私にキレイにラッピングされた細長い箱を差し出した。

「わしからのプレゼントだ。開けてごらん」

丁寧に包装を解き、細長い箱を開ける。そして中であつたものをそつと手にした。

木でできた魔法の杖。

「さあ、魔力を込めて。心で念じればいい」

どうしたらいいのだろうかと迷いながらも、「魔力よ、流れろ」と心で念じる。すると杖の周りの空気が変わる。

パチパチとまるで光が飛び散るように空気が輝き、そして私の髪がふわりと風でなびく。

「これは……」

お父さんは予想外の光景に目を丸くする。
杖はまばゆく光り輝き、その姿を変えた。
柄の部分は星を散りばめたような輝く銀に、
そしてそれ以外は漆黒に染まった。

「私の……杖」

私は嬉しくてお父さんに視線を向けた。

お父さんは驚いたのか、眉間にしわを寄せていた。

「どうしたの？」

尋ねたけれどお父さんは首を横に振り、なんでもないよと笑った。

第二章 魔法協会

お父さんと一緒に暮らし始めて一か月がたった。ようやく食事のマナーや基本的な生活のり

ズムをつかみ、文字や算数、国の歴史なども学び始めている。

お父さんは日中は王城に勤めるけれど、夕方には帰ってきていつも一緒に過ごしてくれた。毎日が幸せだ。

そして休みの日にはいつも時間を作って庭で一緒にお茶を飲んでくれる。

「アルル、ここでの生活には少しはなれたかの？」

お茶を机に置き、につこりと微笑んでうなずいた。

「サリーがいろいろ教えてくれるから毎日が楽しいよ！」

「そうか……なら、そろそろ一度、魔法協会で魔力の検査をして、魔法の勉強も始めようかの」

そう言われ、一瞬わくわくとしたものの、魔法協会での魔力の検査と聞いて不安になった。

「あ……あの……私、本当に魔力があるの？」

その言葉にお父さんは笑い声を上げた。

「なければ杖は色を変えんよ！」

それを聞いてほっとする。

次の週のお父さんの休みの日に、魔法協会へ一緒に行くことになった。



ついに魔法協会に行く日が来た。お腹が痛くて再び不安な気持ちでいつぱいだ。サリ―に手伝ってもらって不安を和らげるようにお父さんとおそろいの魔法使いらしい紺色のローブを着た。

少しでも魔法使いらしく見えればいいのだけれど……

「大丈夫じゃよ。心配はいらん」

お父さんにそう言われ、やっとどうにか気持ち落ち着いたけれど、不安なものだ。魔法協会へはグリフィンのソリに乗って向かう。

建物の前に到着すると私は不安のため息をもらした。

魔法協会は石造りの大きな建物で、入り口には巨大なゴブリンの石像が立っている。

ゴブリンの石像は瞳がギョロギョロと動き、通る者たちをにらみつけていた。

私の表情が暗くなっていることに気づいたお父さんは明るい口調で言った。

「あれはの、悪いやつが中に入らないように見守っているだけじゃ。さあ、行くぞ」

お父さんと手をつなぎ、足早に入り口を通ると、どんどん自分の心臓がうるさくなる。

床に敷かれた絨毯の上に乗ると、お父さんが「魔法検査室へ」とつぶやく。

二人を乗せた絨毯が空を飛んだ。

私はお父さんにしがみつく。すぐに検査室へとたどり着いた。

「さあ、アルル。準備はどうじゃ？」

「だ……大丈夫」

扉が自動的に開いた。検査室はすり鉢状のホールになっているようだ。上を見上げるとそこにはフードをかぶった魔法使いたちが十人ほどいた。

「大魔法使いアロンの娘、アルルよ。中央にある水晶に手を触れよ」

低い男の人の声が響き、私はびくりと肩を震わせた。

お父さんが微笑みながら手で行っておいでと示す。

私は一歩、また一歩と中央の水晶に近づき、目の前に立った。

「手を触れ、唱えよ。『力を示せ』と」

私は深呼吸をしてから、唱える。

「力を……示せ」

次の瞬間、私は大きな黒い扉の前に立っていた。周りを見回すと誰もいない。

「え？ ……ここはどこ？」
そうつぶやいても、声が響くばかり。